

## 『夢の通ひ路物語』の成立について

——『題林愚抄』の成立年次を指標にする可能性——

安 道 百合子

はじめに

『夢の通ひ路物語』は、現在、中世王朝物語と呼びならわされている作品群のなかで、おそらく成立のもっともくだる長編物語である。<sup>1)</sup>『源氏物語』の影響が著しく、模倣の誇りをまぬかれない側面もあるが、何より、この物語の作者が『源氏物語』に傾倒していることを示しているのは、ただ一本存する蓬左文庫本の形態であり、頭注を施した写本であるという点である。

頭注の内容は、物語の説明から典拠指摘に至るまで多岐にわたる。現存本は、物語本文と頭注とが同筆であるが、頭注指摘事項のなかには、現存物語にはない記事の指摘や、いまだ登場前の人物についての注記などを含むので、転写時に新たに注を施したとは考え難く、おそらく作者自身による注ではないかと目されている。また、この物語の内容は、『源氏物語』の影響を強く受けているだけでなく、中世王朝物語にはよくある現象であるが、物語世界内で、『源氏物語』の記事があたかも過去の事実であったかのような文脈で語られ

ていることがある。すなわち、『源氏物語』の世界は「物語」という同一次元の世界の中で一貫して流れている時間軸をさかのぼったところに位置しているわけである。とすると、作者は、単に『源氏物語』を模した長編物語を生み出したのではなく、あたかも『源氏物語』と等価の作品であるかのごとき物語世界を作り出そうとしているのであり、かつ、「古注釈を付した『源氏物語』」伝本に似た形態を、自らの作品に与えたと考えられるのである。

では、この作品の成立時期はいつと考えることができるのだろうか。まず、穏当な手続きとして、手がかりとなるのは、作品内の表現の由来をたどることであろう。引歌表現の典拠や、特徴的な表現の由来を調査することである。工藤進思郎氏『夢の通ひ路物語』<sup>2)</sup>をはじめ、先行研究でかなり整理されている。そのような場合、現代の私達が、まず、目にとめるのは、典拠となるものの原典であるが、むしろ原典そのものではなく、中世に広く行われた古典注釈の営みを視野に入れるべきだと考える。いわゆる「源氏取り」も、作者の

読んだ『源氏物語』や、中世に書かれた「源氏注釈書」を視野に入  
れるべきだと考える。和歌についても同様で、引歌表現を手がかり  
にすると、最も成立の下る用例の和歌を基準に成立年代を見定め  
ることはよく行われることであるが、そのとき、その一首の典拠と  
する歌集は最も古いものを提示するのが常套である。しかし、同じ  
歌が複数の歌集にとられることはよくあることであり、作者が常に  
「古い」和歌集を読んでいるとは限らない。結論を最初に述べると、  
最も時代の下る引歌一首の成立上限を論拠に成立年代を見定めるよ  
りも、複数の和歌の典拠たり得る時代の下る類題集を一つの指標に  
置くことが有効な場合もあるのではないかと考えるのである。『夢  
の通ひ路物語』については、はやく工藤氏が典拠に関する詳細な調  
査をまとめておられ、その後、その成果をさらに大きく飛躍させる  
ものはない。そのなかで、もっとも注目され、成立とも大きく関わっ  
てくるのは、「伏見殿千首」のなかの甘露寺親長の一首である。一  
方、この間、この和歌が収められた『明題和歌全集』についても、  
三村晃功氏により大きく研究が進められた<sup>③</sup>。先学の恩恵にあずかり  
ながらも、ここでもう一度、広く典拠を見渡すことができるのでは  
ないかと思うのである。

ところで、近年、『新編国歌大観』をはじめとして、古典作品に  
についてもデータベース化が広く行われ、そのデータを活用できる環  
境も整ってきた。そのようななかで、大量のデータを一気に比較す  
る方法もさまざまに提示されている。そのなかのひとつに中村康夫

氏の考案した二音一因子方式と呼ばれる和歌の比較方法がある<sup>④</sup>。稿  
者もその方法に学んで、『新編国歌大観』に含まれる和歌と『夢の  
通ひ路物語』の作中和歌・および頭注和歌との比較を試みた。本稿  
はその成果の一端を報告するとともに、『夢の通ひ路物語』の成立  
年代について考えようとするものである。

#### 一 『源氏物語』の歌を本歌とする作中和歌

『夢の通ひ路物語』には九十九首の和歌があり、その本歌の指摘は  
工藤氏前掲書の解題に十三例ある。すべて『源氏物語』の和歌であ  
り、和歌表現はもとより、その和歌を含む場面あるいは構想レベル  
での「源氏取り」が認められるものである。指摘済の十三例につい  
て、『夢の通ひ路物語』の和歌と『源氏物語』の初句とを示してお  
く。なお、両作品の所在情報として巻数あるいは巻名と『新編国歌  
大観』所収の歌番号を付す<sup>⑤</sup>。

① けふはなほ千とせのかけにすむひとぞはつ音の小松ひきぞそへな  
ん(巻一・一一)——年月を(初音・三五四)

② けふぞ我引きむすびたる下ひもをいづれの世にかとけしとはみん  
(巻一・一一)——泣く泣くも(夕顔・四一)

③ たづねてぞあぶくま川の瀬をはやみくりのすぢもそれと知らば  
や(巻二・二七)——知らずとも(玉鬘・三四七)

④ 波まよふみくりや何のすぢぞとも知らで過來し身こそうかるれ

(巻一・二八)——数ならぬ(玉鬘・三四八)

⑤雲のうへもなみだにくもる秋の空などがむらん夜半の月かけ

(巻四・四九) — 雲の上も (桐壺・七)

⑥かれ行きし野辺にみだる小萩原おく露さへぞしづ心なき (巻四・

五一) — 荒き風 (桐壺・五)

⑦秋かぜにあれしかきほの名残とて露おきそふるやまとなでしこ

(巻四・五七) — 今も見て (葵・二二五)

⑧見る度に露うとまれぬなでしこの床なつかしき色ならねども (巻

五・七一) — なでしこの (常夏・三八〇)

⑨まつ里もいかが詠めむ日ぐらしの声きく袖の露ぞひがたき (巻五・

七七) — 待つ里も (若菜下・四九八)

⑩うらなくも染めつる色の藤のはななくもうすくもかかるかごとを

(巻五・八一) — 紫に (藤裏葉・四四二)

⑪木の下の霏ぞつらしさかさまに霞のころも我にきよとや (巻六・

八六) — 木の下の (柏木・五〇七)

⑫忍びねにさはりやすらむあづまやのあまり程ふる軒の玉水 (巻六・

九〇) — さしとむる (東屋・七三〇)

⑬遠かたをこふる涙に水まして身は宇治川のせせにながる (巻六・

九一) — 水まさる (浮舟・七四六)

まず、この十三例に加え、その他に本歌取りと認め得るものを掲げておきたい。以降の例は『源氏物語』の和歌も一首を掲げる。

用例⑤⑥は『夢の通ひ路物語』巻四における、藤壺女御の死を悼

む帝と女御の母の贈答歌である。言うまでもなく桐壺巻の帝と更衣の母との贈答歌が意識されている。物語には、その後、女御の母の歌がもう一首ある。

⑭おもひやれ雲のうへだにすみやらぬ月に露けきあさぢふのやど

(巻四・五二)

この歌もまた、⑤の『源氏』歌(雲の上も涙にくる秋の月いかですむらむ浅茅生の宿)を本歌として考えると考えられる。後で述べることであるが、この物語の和歌は上句のみ、あるいは下句のみに、別の和歌表現の著しい類似が見える場合がある。その和歌としての出来映えの評価はさておき、ここもその例で、自分も涙にくれているが更衣の里はどうしているだろうかと気遣った桐壺帝の歌一首を、涙にくれて空の月を見ることができないと憂う帝の歌と、悲しみにくれる里にも思いをめぐらしてほしいと乞う母の歌とに分けていると思われる。

悲しむ帝の歌はもう一首あり、こちらは夕顔を亡くした光源氏の歌を本歌とすると考えられる。

⑮見しかげのあらぬ煙と立ちのぼる空こそふかきかたみならまし (巻四・四八) — 見し人のけぶりを雲とながむればゆふべの空もむつまじきかな (夕顔・三六)

以上⑤⑥⑭⑮は、藤壺女御の死をめぐる一連の歌であるが、本歌のほうは、恋人や娘を亡くしたという共通点があっても、その亡き人というのは、桐壺更衣であり、夕顔であり、葵の上である。この

ような和歌利用の仕方は、たとえば『無名草子』の「あはれなること」に人の死別に関わる場面が集められているような、あるいは、和歌集の部立て「哀傷歌」を集めていくような、またあるいは、物語歌合において、左右ともに「人を偲ぶ歌」を並べるような、そうした発想が見てとれはしないかと思うのである。

詠歌状況はかなり異なるが表現の近似という点で見過ぎせないのが次の歌である。

⑩ 過ぎにしも又しづみしもふた方にあまりて人のみだるるぞうき

(卷三・三七) —— 過ぎにしもけふ別るるもふた道に行く方知らぬ  
秋の暮かな(夕顔・四四)

この歌は卷三の後宮の歌で、弟の岩田中将が兄(后宮)にとってはもう一人の弟岩田大納言の罪をかぶって流罪の憂き目を見、その岩田大納言が自殺する、という二人の身の上を嘆いた歌である。本歌としたいのは光源氏の歌で、夕顔を亡くし、空蟬と別れた後の歌である。死に別れ、また生き別れた二人の人物に思いを馳せる点は共通する。

またすでに別稿で指摘したことがあるが、

⑪ 波かぜも此世つきぬとひびきそふかねのみさきに今ぞたえぬる  
(卷五・七〇) —— 鐘の音の絶ゆるひびきに音をそへてわが世つきぬと君に伝へよ(浮舟・七五五)

挿入的に語られる六条の君という入水する女君の物語の最終局面で入水に際して女君が詠んだ歌である。『狭衣物語』ほか先行物語

の影響がさまざまに見える入水物語のなかであって、唯一、最後の和歌の表現に浮舟詠との類似が認められる。これも、入水という一つのテーマで集められた複数の物語への目配りのなかの一例とみなすことができるような例である。

以上のように、『源氏物語』の和歌を本歌とする作中和歌には、似た発想の歌を多く集めて、そのなかからさまざまに表現を踏襲していく、そのような和歌作りの態度が見える。

## 二 コンピュータの見つける本歌

では、『夢の通ひ路物語』の作中歌すべてと『新編国歌大観』所収和歌とを、二音一因子方式で比較するとどんな結果が得られるか。末尾の〈資料1〉は、十五因子以上の一致が見られた歌をまとめたものである。なかには、時代の相当する歌も含まれており、また明らかかな影響があるかどうか判断に迷う場合もあるが、ひとまず、数値のうえで区切って提示することとした。

驚いたことに、作品内和歌の一首と、和歌の初句以外すべて同じという和歌が存在した。

卷三で無実の罪で播磨の浦に流された岩田中将の歌である。場面は、須磨の源氏そのままに、都を懐かしく回想する岩田中将を描く。

哀をそふる虫の音そこはかとなく聞て、風ひやゝかに、更にふけ行夜の空、月いとあかく浦波に影うつるも、よにふりし折からは、絵物語・みちのきなどにこそ、かゝるけしき見忍びし、

と、めづらしう見わたし給へば、いづれの山ぞさは鹿の声打そへて、たへがたきこゝちも増れば、

秋かぜはみやこの空にかよふらし月にきこゆるさは鹿のこゑ  
いづこもめなれたまはねば、すさまじくいわんかたなし。

(巻三・三六・集成九八頁)

都では目慣れない哀れ深い秋の風景が描かれたあと、郷愁にかられる中将が独り詠む歌である。この歌とほとんど同じ歌が『題林愚抄』に存する。題は「月前鹿」。

同(元享三九十三仙洞会)

有忠卿

三七三二 山風や都の空にかよふらし月にきこゆるさをしかのこゑ  
ちなみに申し添えておくと、岩田中将の和歌の直前の波線部「いづれの山ぞさは鹿の声」というのは引歌表現と思われ、既に『惟宗光吉集』秋部九九番歌の指摘がある。ところがこの光吉の歌は、前掲『題林愚抄』有忠詠の次に置かれた歌なのである。

同(元享三九十三仙洞会)

光吉

三七三三 月をのみひとりながめて更くるよにいづれの山ぞさをし  
かの声

まず、岩田中将の歌と有忠詠との関係であるが、このような場合、この二首は、同一作品の異同と見るのがごく自然な関係であろう。一方が和歌で一方が物語内和歌ということになれば、同一人物の作か、もしくは、一方がもう一方の歌を意識的に用いたと考える。

偶然の一致という可能性は極めて考え難いと思う。有忠は鎌倉・南

北朝期の歌人(『和歌文学大事典』によると、弘安四(一二八一)～暦応元(一三三八)年)である。室町中期以降の成立と目されるこの作品の作者となる可能性はないが、では、なぜ、これほどの一致が見えるのか。作者が有忠と何らかの関わりを持つ人物である可能性は考えられよう。

ところで、『題林愚抄』とは、『明題和歌全集』の基幹になったと考えられている室町期の類題集である。『和歌文学大事典』には、「成立は文安四(一四四七)年から文明二(一四七〇)年までの間か」と記される。『新編国歌大観』は寛永十四(一六三七)年板本を底本としており、それより古い善本がないようである。一方の『明題和歌全集』は三村氏の『明題和歌全集』(福武書店)で確認でき、ここに挙げた歌はいずれも一字一句違わず収められている。以下、二つの類題集の考察にあたり、比較は現段階ではそれぞれの活字本で行った。

ここで、ひとまず、そのほかの結果を見ると、やはり最初に掲げた指摘済みの『源氏物語』の歌が含まれている。しかし、気にとめたいのは、それらの歌が、『風葉和歌集』『物語二百番歌合』『無名草子』などに収められている和歌だということである。すなわち、『源氏物語』そのものを読まなくても目に入りうる歌であり、『源氏物語』のなかでも知名度の高い歌だということである。ちなみに、これらの本歌については、『夢の通ひ路物語』頭注に指摘は一切ない。しかし、『源氏物語』に関する指摘がまったくないわけではない。

いのである。頭注における『源氏物語』に関わる指摘は、引歌レベルのものに限られていて、たとえば「源氏 若紫」「光君 源氏 紫上死去の後歌」のように、簡潔に引用している。『風葉和歌集』などでは巻名を記すことはないから、巻名が記されている例が多いことは、注意される。

また『源氏』以外の歌には用例5・7・8・9のようなものがある。5・9は歌の発想に近似したのが見えるだけでなく、「ししばしとどめん」や「ぬるにこそ」といった共通する表現が見える。7・8はより句レベルで近似しており、上句がほぼ同じ表現である。ここに、雅有・雅経など飛鳥井家の歌人の私家集との類似が見えるのは、ひとつの傾向を示しているものとして、注目できるのではないだろうか。いわゆる本歌取りのような先行する歌の世界を踏まえて、新たな歌世界を生み出すというのではなく、先行する和歌の上句をそっくり利用して、下句を詠みかえるような、習作的和歌作りが連想される。

### 三 頭注にある引歌指摘

次に、三百四十一例ある頭注のうち、引歌指摘を含む注に関して検討を行いたい。引歌指摘とは、引用和歌の前に「引歌」と書かれているものほか、文章化して「此歌引也」との注記があるものとする。頭注の引用に際し、『鎌倉時代物語集成』所収の「底本頭注」に付された番号を用いた。なお、頭注本文引用も基本的に同書によ

るが、古典研究会叢書の影印本により改めた場合がある。

頭注の記述の仕方は一様ではなく、典拠を書いている場合と、「引歌」としか書かれていない場合とがある。また典拠の示し方についても、簡潔に書いてある場合と、「伊勢物語に」や「拾遺の歌に」のように文章化されている場合とがある。簡潔に書いてある場合も、「歌集（歌会）・作者名」を記す場合と、「作者名」のみ記す場合があり、後者も歌の前に記す場合と後に記す場合とに分かれる。さて、これらの典拠について、原出典の調査はすでになされているが、稿者がここで問題にしたいのは、それらの歌の他書所伝である。末尾（資料2）に、頭注と、その出典及び他書所伝を掲げる。なお、調査は『新編国歌大観』所収歌集の範囲内で行った。頭注については、その記述の様相についても問題としたいため、当該注の全文を記すことにした。

これらの作業を通して、物語以外を典拠とし、「出典・作者名」を明示してある和歌のうち、『題林愚抄』所収歌については、ほぼ『題林愚抄』の典拠指摘に準じた指摘になっていることがわかる。

表では典拠指摘を含むものに○印を付した。また、『題林愚抄』所収和歌を含む頭注は、45・58・83・92・99・101・155・172・279・292・293・309・333・334・335・336・337・338である。この数は決して多いとはいえないが、物語の後半部ほど詳細な指摘が見え、とくに『玉葉和歌集』以降の勅撰和歌集や、広く巷に知られていたとは考えがたい歌会の典拠などは、『題林愚抄』の典拠指摘に準じている。『題林愚

抄』では「統千」「新後拾」などと簡略に記されているのが、頭注では「統千載集」「新後拾遺」となっている点に異なりはあるが、その歌集名あるいは歌会名をそのまま踏襲している。

頭注335は「新古今和歌集」の「二条院讃岐」の和歌と記される。

『題林愚抄』では集付に「同」とあって、前歌の「新古」を受け継ぐ。作者名は「菅贈太政大臣」とあるが、前歌の作者は「二条院讃岐」とある。ところが原出典の『新古今和歌集』では、当該歌は卷十八雑下の巻頭歌であり、作者名は「菅贈太政大臣」である。頭注の作者名「二条院讃岐」は明らかに誤りであるが、この誤りは『新古今和歌集』を見ては生じない。

また頭注338は「同集」「忠成」とあるが、頭注の前歌の出典「後拾遺」には存しない。『題林愚抄』でも集付は空白で前歌の「後拾」を引き継ぐ。ただし、頭注337歌と338歌は『題林愚抄』において同題「王昭君」のもとに並べられた歌であり、頭注の引用以下の文章「此歌も前のうたも王昭君をよみたる歌なれば」も、『題林愚抄』からの引用と考えたほうが矛盾しない。そのほか、頭注336歌は、原出典の『統千載和歌集』二〇〇〇番歌では初句が「なげかじよ」であり、これも『題林愚抄』の表記に準じたものとなっている。

以上のように、原出典からの引用と考えるには矛盾する注記も『題林愚抄』からの引用とすれば問題ないのである。

工藤氏はその成立について論じた際、この最も下る引き歌（頭注333）の成立上限として、「伏見殿千首」なる歌会が行われた時を見

定められた。しかし、これらの例を見るかぎり、少なくとも『題林愚抄』の成立以後と考えるのが自然である。より上限を見定めるとすると、『題林愚抄』の成立に具体的に関わっている人物の作である可能性を考慮にいれて、成立過程と見ることも許されよう。そのとき、実はふたたび工藤氏の説にもどっていくことになる。『題林愚抄』のなかでもっとも典拠の新しいものの一つが、「伏見殿千首」だからである。

上限を『題林愚抄』として、下限をどう定めるかの手がかりと成り得るのは、「源氏物語古注釈引用和歌」を踏まえたものがきわめて多いことである。ちなみに、『新編国歌大観』番号で一〇四三〇番歌は『源氏釈』、四三二〜五三二番歌は『奥入』、五三三〜一〇一〇番歌は『紫明抄』、一〇一一番以降は『河海抄』の歌である。

頭注53には「あたらよのつきとはなとはおなしくはころしられんひとにみせはや」がひかれ、頭注122にも同じ歌（二句つきとはなとを）がひかれる。これに対して、『後撰和歌集』一〇三番歌をはじめ十三文献に、十五例同一和歌が見出せるものの、それらは「あたらよのつきとはなとを」おなしくはあはれしれらむひとにみせはや」という歌であり、唯一、「源氏物語古注釈引用和歌」の四二六番のみが「あたらよのつきとはなとを」おなしくはころしられらむひとにみせはや」となっている。

頭注128「とりかへすものにもかなやいにしゑを」は「源氏物語古注釈書引用和歌」に九例存するうち、八例は三句「よのなかを」と

なっていて、一例のみ「いにしへを」とある。また、頭注311に引かれた和歌の第四句「逢より外の」は、原出典の『拾遺和歌集』には「あふひならては」とあり、「源氏物語古注釈引用和歌」で「あふよりほかの」となっている。これなどは、『夢の通ひ路物語』本文の引用部分に同じということで、後者のほうがより適切な引用和歌と言えよう。

このように、他書所伝と認め得ると判断をしたなかでも、和歌の一句が異なる歌がほとんどであるという場合に、頭注と同じ和歌が見つかるのが「源氏物語古注釈引用和歌」なのである。必ずしも、室町期以降の「源氏物語古注釈」に同じ句で引用されているものがあるとは限らないが、原出典からの引用ではなく二次資料からの引用の可能性はより高まる。「源氏物語古注釈」に限らなくてもよいのかもしれないが、頭注は、こうした物語の引歌表現指摘を集めたような二次資料からの引用を多く含んでいると考えるための傍証たり得るのではないだろうか。それがどの書物なのか、特定するには至っていない。

#### 四 『題林愚抄』と『明題和歌全集』

これまでに挙げた『題林愚抄』所収歌はすべて『明題和歌全集』にも収められている。次に問題となるのは、『題林愚抄』からの引用か『明題和歌全集』からの引用かという点である。

活字本のかぎりでは、わずかな異なりは頭注337にある。

此国人にならんものとは 引歌

後拾遺和歌集

おもひきやふるき都を立はなれ此国人にならんものとは

僧都懐寄

との記述である。

『題林愚抄』は傍線部が「懐寄」とあり、『明題和歌全集』は「懐寿」とある。『後拾遺和歌集』には「懐寿」とあり、「懐寿」が正しいと思しい。頭注は、『鎌倉時代物語集成』の翻字も、工藤氏の翻字もともに「寿」とあり、たしかに「寄」「寿」のくずし字体は近似しているが、『夢の通ひ路物語』の影印ではウ冠のところははっきりしており「寄」の字に見える。そうすると、少なくとも寛永版本『題林愚抄』の「寄」と同じということになる。わずか一字の異なりではあるが、それが誤りの伝承であるからこそ、その一致の意義は見過ごせない。

その他に、両歌集の差異を探すと、『明題和歌全集』に四例存する「伏見殿千首」の集付は、『題林愚抄』には五例見える。それをすべて掲げる。(a)露はらふひまこそなけれよもぎふの宿ふりまさる五月雨の比(二三七四 茂成朝臣) (b)浪かくる松のしづえも朽ちぬべし日数つもりうらの五月雨(二三七八 重賢朝臣) (c)はし姫の身をうぢ河にとぶ虫消えぬ思ひや今ももゆらん(二四七四 親長) (d)夕すずみそのまま松のかけしめてしばしぞみつるみじかよの月(二七〇四 雅親朝臣) (e)うら風に雲もさわぎてなる神のひびきのなを過ぐ



る夕立（二六三六）雅親朝臣 このうち、最後の(e)歌は『明題和歌全集』では「伏見院千首」との集付である。ただし作者は飛鳥井雅親で、(d)歌の作者と同じなので、にわかになどどちらが正しいとも、決め難い。このほかに『題林愚抄』『明題和歌全集』ともに「伏見院千首」とする歌が一首あり、(f)つくばねのかけの田井にもあまるらしめぐみの露の茂きさなへに（二二七七）季春）であるが、この作者「季春」も「文安三年詩歌合」に参加しており、他の四人と同時代歌人である。「殿」と「院」が同じ歌会を示すとすれば、この歌会が編集時に比較的近い時期に催行されたため、歌会名にゆれが生じたということも考えられる。仮に同じ歌会でなくとも、同時代の少なくとも五人の歌人が参加した「伏見殿（院）千首」の歌に関するかぎり、二つの類題集はともに同じ歌を収載しており、『題林愚抄』成立年次の上限手がかりとなるわけである。そのほかの新しい出典注記としては、「文安二七廿内御統歌」の三首（資任・定親・雅親）と「文安四八十一内御統歌」の一首（公綱）とがある。これらの比較的新しい歌会からとられた和歌に雅親の歌だけが三首入っていることには、雅親がすぐれた歌人であったことを差し引いても、何らかの意味を認めることができるだろうか。

とまれ、『題林愚抄』の成立に関しては「重賢朝臣」「茂成朝臣」「親長朝臣」の呼称から推測された、三村氏の文安四年以降宝徳元年以前とする説に従うことができよう。とすると、『夢の通ひ路物語』の成立はそれと重なる時期かそれ以降ということになる。

## 五 頭注文言と源氏古注

成立時期を考える手がかりとして、もう一点気になるのは、頭注に見える物語からの引歌指摘に含まれた文言である。引歌の指摘だけでなく、そのあとに、解説のような文章が付されている場合があり、そこに用いられる文言により、ある程度、執筆年次が定められるのではないかと思うのである。頭注<sup>214</sup>には

双紙の地よりいふ言葉なり

とある。「双紙の地」という表現が『源氏』古注で用いられるようになるのは、伊井春樹氏『源氏物語注釈史の研究』によると、宗祇（一四二一—一五〇二）が最初である。ただし宗祇注の使用例は『雨夜談抄』一例に限られる。宗祇は「作者の詞」と「草子の地」（伝承者の語りかけ）とを区別していたと考えられ、それを引き継いで『一葉抄』に「双紙の地」という語が見えるが、三条西実隆に至ると、その厳密な意味区別を失って「草子地」という言葉に集約されていく。<sup>3</sup> 頭注での用例は、物語の語り手の言葉としてとらえることができる点でも、宗祇使用語彙に近い。宗祇以後わずかな期間に使われたその語を使用していることは注目されてよい。また、入水説話の引用に「ちぬ」「ささだ」という二人の男の名を掲げる古注が一条兼良（一四〇二—一四八一）の『歌林良材』にしか見えないこと<sup>10</sup>や、前の記述との対応を説明するときに「と云たる首尾也」と説いているのは『古今集聞書』を出発点として歌論用語として定着していることなどを考え合わせると、歌論の伝統の流れにおいても、

兼良の影響を見過ごせまい。すでに指摘されているように『夢の通ひ路物語』の『源氏物語』引用が「青表紙本系統」であること<sup>(1)</sup>を考へ合わせると、その後、三条西実隆に結実される古典学の流れのなかのどこかに『夢の通ひ路物語』の成立年代を見ることができないか。実隆が師とした雅親の周辺など飛鳥井家の人物の可能性もまた考え得るのではないかと思うのである。歌人が詠んだにしては、和歌そのものの完成度には疑問を感じるころもあり、習作的な作品に見える。しかし、その和歌表現のうち、飛鳥井家の私家集に見出せた表現との類似には、なお興味深い点があるのではないかと思うのである。

#### おわりに

以上、断片的であるが、『夢の通ひ路物語』の作中和歌に顕著な影響が見える先行詠と、頭注の引用和歌の典拠、ならびに引用態度について、報告した。考察を加えるにはなお、古注釈への広い目配りが必要と思われる、現段階では、先行論の成立年代を修正するには至っていない。

『夢の通ひ路物語』の成立については、やはり室町後期以降と言わざるを得ない。ただし、それを見定めるのに、重要になってくるのは、『題林愚抄』の成立時期であるということは確かであろう。そして、その成立は限りなく下るのではなく、遅くとも宝徳元(一四四九)年までに成立した『題林愚抄』の成立過程と重なる時期か、

その後そう遅くない時期に限定してよいのではあるまいか。

#### 注

- (1) 工藤進思郎氏「『夢の通ひ路物語』の成立追考―伏見殿千首歌(引歌)と『源氏物語』の依拠本文をめぐって―」(岡山大学法文学部学術紀要四〇・一九七九年二月)によれば、「室町中期以後」とされる。
- (2) 工藤進思郎・伊奈あつ子・川嶋春枝・高見沢映子『夢の通ひ路物語』(福武書店 一九七五年三月)
- (3) 工藤進思郎氏「『夢の通ひ路物語』の典拠に関する調査」(金城学院大学論集一七・一九七五年三月)と、前掲注2の解題とに、典拠に関する調査結果がまとめられている。
- (4) 三村晃功氏『明題和歌全集』(福武書店 一九七六年)ならびに『中世類題集の研究』(和泉書院 一九八五年)
- (5) 中村康夫氏の二音一因子方式は「勅撰集の中でコンピュータが選んだ類歌」(文部省科学研究費補助金特定領域研究「人文科学とコンピュータ」テキスト処理)「成果報告書 一九九九年」に発表されたのを初めとする。方法については、稿者が国文学研究資料館勤務期間にご教示いただいた。和歌の比較方法について簡単に示しておきたい。新編国歌大観CD-ROMに含まれる和歌データを利用して、できるかぎり漢字をかなに置き換える処理を施し、二文字以上連続する漢字と主要な漢字をかなに置き換えた和歌データを独自に作成した。その上で比較したい和歌から二音の連続文字列をすべて取り出す。この二音を一つの因子として、いくつの因子を比較相手の和歌が含んでいるかを数値で示す方法である。

#### (6)

『夢の通ひ路物語』の本文引用は『鎌倉時代物語集成』第六巻(市古貞次・三角洋一編 笠間書院 一九九三年)による。また和歌の



<p>【七七】まつ里もいかが詠めむ日ぐらしの声きく袖の露ぞひがたき</p>	<p>源氏物語</p>	<p>【四九八】待つ里もいかが聞くらんかたがたに心さわがすひぐらしのこゑ</p>
<p>【八五】木の下の雫ぞつらしさかさまに霞のころも我にきよとや</p>	<p>源氏物語</p>	<p>【五〇七】木の下のしづくにぬれてさかさまにかすみの衣着たる春かな</p>
<p>【五】なれよいかに行きかよひ路に関もがなしばしとどめんあまつかりがね</p>	<p>風葉和歌集</p>	<p>【六一五】木のしたのしづくにぬれてさかさまに霞の衣きたる春かな</p>
<p>【一四】心あらばあはれとは知れせずむしのふりすてがたき思ひ有る身を</p>	<p>続千載和歌集(作者・為世)</p>	<p>【五七】おなじくは空にかすみの関もがな雲路のかりをしはしとどめん</p>
<p>【七二】思ひわび落つるなみだのたま琴のしらべにそへてねをやなまし</p>	<p>明日香井和歌集(雅経)</p>	<p>【二七六】おもひわびおつる涙のたまごとにくだきはてもあるころかな</p>
<p>【一四】心あらばあはれとは知れせずむしのふりすてがたき思ひ有る身を</p>	<p>千五百番歌合(作者・丹後)</p>	<p>【二三三七】うき世とはおもふものからすすむしのふりすてがたき身をいかにせん</p>
<p>【五五三九】鈴虫のこゑにつけてもさすがなほふりすてがたき思ひとをしれ</p>	<p>雪玉集(実隆)</p>	<p>【五五三九】鈴虫のこゑにつけてもさすがなほふりすてがたき思ひとをしれ</p>
<p>【一四】心あらばあはれとは知れせずむしのふりすてがたき思ひ有る身を</p>	<p>千五百番歌合(作者・丹後)</p>	<p>【二四七一】おもひわびおつるなみだのたまごとにくだきはてもある心かな</p>
<p>【五五三九】鈴虫のこゑにつけてもさすがなほふりすてがたき思ひとをしれ</p>	<p>雪玉集(実隆)</p>	<p>【二四七一】おもひわびおつるなみだのたまごとにくだきはてもある心かな</p>
<p>【一八二三】なみだにもなにくもるらん世のうきめみえぬ山路の秋のよの月</p>	<p>続千載和歌集(作者・談天門院帥)</p>	<p>【一二】雲のうへのつきもなみだにくもりつつありしながらのかげだにもなし</p>

<p>【四三】春かぜにみぎはの氷とけぬれど袖のつららぞ増りがほなる</p>	<p>親盛集 隣女集（雅有）</p>	<p>【二四二】春風にみぎはのこほりとけぬらしさざなみよするこやのいけ水</p>
<p>【五三】ぬるにこそかへしても見め小夜ごろも袖のなみだに夢もむすはず</p>	<p>三百六十番歌合（正治二年）（作者・兼宗） 六百番歌合</p>	<p>【六四四】ぬるにこそゆめもみゆらめさよごろもかへすはうすきおもひなりけり 【一二五】ぬるにこそゆめもみゆらめさよごろもかへすはあさきおもひなりけり</p>
<p>【五七】秋かぜにあれしかきほの名残とて露おきそふるやまとなでしこ</p>	<p>続古今和歌集 題林愚抄</p>	<p>【八一九二】ぬるにこそ夢もみるらめさよ衣かへすはあさき思ひなりけり 【五五七】あなこひしいまもみてしかやまがつかきほにおふるやまとなでしこ</p>
<p>【七】めづらしや春の霞のなにゆゑに立ちへだてけんおなじならしむを</p>	<p>題林愚抄（作者・入道二品親王）</p>	<p>【七三二】春のよのならひもつらしなにしかもくもらぬ月のかすみそめけん</p>
<p>【一〇】五月雨もひがたき袖のなみだにぞあやめもわかずけふや過ぎなん</p>	<p>黄葉集光広</p>	<p>【二〇六】それとだにあやめもわかずあや菫まつにかさなる袖の涙に</p>
<p>【三二六】秋かぜはみやこの空にかよふらし月にきこゆるさを鹿のこゑ</p>	<p>題林愚抄（作者・寂蓮法師）</p>	<p>【三六五二】をのへより門田にかよふ秋風にいなばをわくるさをしかのこゑ</p>

〔資料2〕 引歌指摘を含む頭注とその和歌の出典及び他書所伝一覧

出典 <sup>(*)1</sup>	巻	注番号 <sup>(*)2</sup>	頭注	和歌の典拠 <sup>(*)3</sup>
物	一	5	いざといふしを引歌／伊勢物語に／くりはらのあねはのまつこのひとならばみやこのつとにいざといわまし／「いざといわまし」といふしを、こゝにては、「いざといふし」ともちかへていふ也。この少将、あだめきたる人故に、うらみをもをひしと、あだなる心のいましめにかく也。	夫木和歌抄【一三八〇七】／歌枕名寄【七二〇六】／伊勢物語【二二二】／古今和歌集古注釈書引用和歌【九五】
×	一	6	世の中をいとはで引歌／世の中をいとはでくらす人もがなぐやくしく過しむかしかたらん／今、是にてはかなるがたけれど、おわりの巻に、さまざまこのめのと、かなしかりしことども有。されは、つねにか様にいふしと也。里人などは、この心はしるまじければ、只、子などなきとて、かくいふと語る也。「二子出家すれば九ぞく天に生ず」といふ心。	古今和歌集【三八】／古今和歌六帖【四一四七】／和漢朗詠集【一〇〇】／友則集【三】／信明集【一〇〇】／定家八代抄【四七】／源氏物語古注釈書引用和歌【二二七】【三〇八】【三二七】
×	一	10	君ならで引歌／きみならて誰にか見せん梅の花色をも香をもしる人ぞしる／とふときひぢりなれば、よくおぼしあきらむべければ身にちかき人よりも、この人にたのみ奉ると也。	後撰和歌集【二一〇二】／古今和歌六帖【二四二二】／兼輔集【一二七】／前十五番歌合【一一】／三十人撰【五三】／三十六人撰【六七】／深窓秘抄【八六】／室物集【四五八】／沙石集【八七】／大和物語【六一】／別本和漢兼作集【三二】／定家八代抄【一四八一】／源氏物語古注釈書引用和歌【五】【二〇四】【六六二】【六九三】【七七六】【八二三】【九〇九】【九三九】
×	一	16	此やみにまよひ引歌／人のおやのこゝろはやみにあらねども子をおもふ道にまよひぬるかな	新勅撰和歌集【一六】／和漢朗詠集【七七三】／和歌無底抄【二〇】／撰集抄【六二】／源氏物語古注釈書引用和歌【一二四】（下句こよひはみにもあまりぬるかな）
×	一	21	袖にもあまる／うれしさをむかしは袖につゝみけり／此歌引也。	拾遺和歌集【五】／拾遺抄【四】／古今和歌六帖【一三】／和漢朗詠集【七二】／素性集【四九】／俊頼髓脳【一六三】／源氏物語古注釈書引用和歌【四四九】【二四〇五】
×	一	26	あら玉のとしかへる／あら玉のとし立かへるあしたよりまたるゝ物は鶯の声／そのうぐひすよりも、又御さんの御ほど待久しきとなり。	

○	○	○	×	○	×	×
一	一	一	一	一	一	一
52	51	45	39	32	30	29
<p>光はおぼろに引歌／新古今 大江千里／てりもせずくもりもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしく物ぞなき</p>	<p>花なきさとに引歌／古今集／春がすみ立を見すて、ゆく雁は花なき里にすみやならへる／伊勢</p>	<p>花と友に引歌／続千載／てる月も光をそへよ春ならでいつかは花とともにみるべき／後法性寺入道関白／「おもひけぢめなしや」といふにて、歌にかなはせたり。廿六日比なり。</p>	<p>霞のたちまる／きのふけふ雲のたちまひかくろふは花のはやしをうしとなりけり／此ころにていふ也。</p>	<p>けふはなを千と世の陰に／宮の御歌なり。「千と世の陰」は中将をたとへ、「すむ人」は北のかたなり。五えうの枝を小松といふは、子をまつ心によせたり。やがて引そへ給ふをみんと也。／拾遺の歌に／松の上になく鶯の声をこそはつ音の日とはいふべかりけり</p>	<p>千と世のかげにと／万代の松にぞ君を祝つる千と世のかげにすまむとおもへば／ふたりの繁昌なる陰を見てながらへんと、おなじ祝事なれど、少づゝおもひ入てうたにのべかへたり。</p>	<p>あふみのや引歌／あふみのやかぢみの山をたてたればかねてぞみゆる君が千と世は／けふ給るもちるにて、君の千と世を祝見奉ると也。</p>
<p>新古今和歌集【五五】／千里集【七二】／俊頼髓腦【一六二】／和歌童蒙抄【二六】／井蛙抄【一六二】／愚問賢注【八】／今物語【三】／別本和漢兼作集【五五三】／六華和歌集【七三】／定家八代抄【七七】／歌林良材【二八七】／源氏物語古注釈書引用和歌【六八】</p>	<p>古今和歌集【三二】／新撰和歌【三五】／古今和歌六帖【四三七】／和漢朗詠集【三二六】／伊勢集【三〇三】／源氏物語古注釈書引用和歌【三六八】</p>	<p>続千載和歌集【九〇】／万代和歌集【二二四】／題林愚抄【九八四】</p>	<p>業平集 I 【三四】／伊勢物語【二四】／業平集 II 【四〇】</p>	<p>拾遺和歌集【二二】／新撰朗詠集【二七】／源氏物語古注釈書引用和歌【二四〇九】</p>	<p>古今和歌集【三五六】／古今和歌六帖【二二五七】／素性集【四二】／定家八代抄【五九七】／源氏物語古注釈書引用和歌【七二八】</p>	<p>古今和歌集【一〇八六】／柿本人麻呂勅文【三二】／歌枕名寄【六二〇一】／大嘗会悠紀主基和歌【五】【一三八】／源氏物語古注釈書引用和歌【一七六】【二八九四】</p>

×	×	×	×	×	○	物	×
一	一	一	一	一	一	一	一
75	72	69	68	59	58	57	53
<p>大空をのみ引歌／大空はこひしき人のかたみかは物おもふごとにながめられけり</p>	<p>おもはじと思ふも物を引歌／おもはじとおもふものをおもふかなおもはじとだに思はじやさは</p>	<p>ふしぎに残引歌／見し人の過にし事をかぞふればふしぎに 残我命かな</p>	<p>取かへす物にもがなや引歌／取かへすものにもがなやよの中をむかしながらの我身とおもはん</p>	<p>ひたちおびのむすぶちかひを引歌／あづま路の道のはてなるひたち帯のかごと計もあはむとぞ思ふ／鹿嶋の明神の御前にて帯をかくる事有。うらなどの様なることなれば、神慮ならではいかゞ、といふ心なるべし。</p>	<p>あさかの沼の引歌／続古今集／契をばあさかのぬまとおもへばやかつみながらに袖のぬるらん／今上</p>	<p>いにしへは有もやすらん引歌／伊勢物語／いにしへは有もやすらん今ぞしるまだ見ぬ人をこふるものとは</p>	<p>あたら夜なりけりや引歌／あたら夜の月と花とはおなじくは心しられん人にみせばや</p>
<p>古今和歌集【七四三】／古今和歌六帖【二五五】</p>	<p>源氏物語古注釈書引用和歌【四五九】</p>		<p>源氏物語古注釈書引用和歌【二六】【三五三】【三七三】【五六三】【八七八】【九四一】【二七九七】【一九三三】 (四句ありしながらの)</p>	<p>新古今和歌集【一〇五二】／古今和歌六帖【三三六〇】／俊頼髓脳【二三八】／綺語抄【五三二】／和歌童蒙抄【四八五】／奥儀抄【六一五】／袖中抄【三三一】／和歌色葉【七六】／定家八代抄【九一八】／色葉和難集【二九〇】【九四三】／歌林良材【四七七】【六四〇】／古今和歌集古注釈書引用和歌【四三七】／源氏物語古注釈書引用和歌【二〇六】【三二六】【二〇四七】／六花集注【一九四】</p>	<p>続古今和歌集【一〇二九】／題林愚抄【六四〇八】／歌枕名寄【六八九五】</p>	<p>新勅撰和歌集【六二九】／伊勢物語【二九〇】</p>	<p>後撰和歌集【一〇三】／信明集【九九】／俊成三十六人歌合【七〇】／時代不同歌合【一八一】／三十人撰【八一】／三十六人撰【一〇〇】／古来風体抄【三〇五】／中務集【二七九】／雲玉集(馴窓)【九〇】／定家八代抄【一六七】／三百六十首和歌【五五】／歌林良材【四二四】／源氏物語古注釈書引用和歌【二二五】【三〇九】【四二六】【八五七】</p>



×	△	物	×	△	×	×	×	物
二	二	二	二	二	二	二	二	一
91	90	87	86	85	84	83	82	80
夢てふものは引歌／うたゝ寝に恋しき人を見てしより夢てふものはたのまれにけり	夢と知りせば／小野小町／おもひつゝぬればや人の見えつらん夢としりせばさめざらましを	逢夜ありや引歌／源氏 空蟬の巻／見し夢を逢夜有やとなげく間にめさへあわでどころもへにけり	誰かれ時のたど／し引歌／夕やみは道たど／しき月まちてかへれ我せこそその間にも見む	そよぐは鹿のと／大納言すけ局／岩ねふみたれかはとはんならの葉のそよぐは鹿の渡るなりけり	かゞみの影もあわれに引歌／わかれても影だにとまる物ならば鏡を見てもなぐさみてまし	我袖はしほ干に見えぬと引歌／我袖はしほひに見えぬおきの石人こそしらねかはく間もなし	夢にやみんと引歌／宵は待夜中はうらみあかつきは夢にやみんとまどろみぞする／されば、末のこと葉に「宵の待間はあらねども」と云のべたり。	草の戸ざしと引歌／源氏 若紫／たちとまり霧のまがきのすぎうくは草の戸ざしにさわりしもせじ
古今和歌集【五五三】／古今和歌六帖【二〇七六】／小町集【一七】／定家八代抄【一二二五】	古今和歌集【五五二】／新撰和歌【三〇〇】／古今和歌六帖【二〇二九】／小町集【一六】／和歌体十種【二四】／三十人撰【九一】／三十六人撰【六三】／俊頼髓脳【一八八】／奥儀抄【二三〇】／古来風体抄【二七五】／桐火桶抄【二〇九】／悦目抄【三三三】／十訓抄【七二】／定家八代抄【一二二四】／伊勢物語【三三二】／無名草子【八〇】	源氏物語【二一】	新勅撰和歌集【八八一】／古今和歌六帖【三七二】／伊勢集【四三七】／源氏物語古注釈書引用和歌【二四】【二五九】	平家物語（覚一本）【一〇二】／源平盛衰記【二五六】	風葉和歌集【五二八】／源氏物語【一七三】／無名草子【一二二】	千載和歌集【七六〇】／二条院讃岐集【五一】／百人秀歌【九四】／百人一首【九二】／題林愚抄【七七三九】／女房三十六人歌合【四八】／定家八代抄【九五六】／和歌密書【一八】	源氏物語【六七】／無名草子【三二】／伊勢物語古注釈書引用和歌【四三三】	

○	物	×	物	×	×	△	×
三	三	二	二	二	二	二	二
101	100	99	97	95	94	93	92
いづれの山ぞ引歌／光吉 元亨三年九月十三日御会／月をのみひとりながめてふくる夜にいづれの山ぞさほ鹿のこゑ	帰る波路も引歌／伊勢物語 なり平／いとゞしく過行かたのこひしきにうらやましくも帰る波かな	から国に引歌／から国にしづみし人もわがごとくみよまであわぬなげきをやせし	かのなり平の神はうけずと引歌／伊勢物語 在原業平／恋せじとみたらし川にせし御祓神はうけずも成にけるかな	白／と引歌／白／としらけたる夜の月影に雪かき分てむめの花折	よし野はしらず、爰にめづらし引歌／爰に今めづらしとみるはつ雪をよし野／山にふりやしぬらん	雪の山作らせ給、めづらしと御遊ありし引歌／清少納言／こゝにのみめづらしと見る雪の山とこゝろ／にふりにけるかな	いづれを梅と引歌／雪ふれば木ごとに花ぞさきにけりいづれと梅とわけてをらまし
光吉集【九九】／題林愚抄【三七三三】	後撰和歌集【二三五二】／時代不同歌合解題【二】／伊勢物語【八】／源氏物語古注釈書引用和歌【九九】【七一七】／定家八代抄【七九三】	千載和歌集【二〇二五】／堀河百首【二五八〇】／和歌童蒙抄【三四四】／和歌色葉【四七三】／題林愚抄【九四五〇】／定家八代抄【一五五〇】	古今和歌集【五〇一】／新撰和歌【三五六】／金玉和歌集【四一】／新撰髓脳【三】／俊頼髓脳【一〇一】／奥儀抄【八六】／袖中抄【五五二】／六百番陳状【二一七】／古来風体抄【二七三】／和歌色葉【六二】／近代秀歌【九四】／井蛙抄【七】／伊勢物語【一一九】／定家八代抄【一二四二】／五代集歌枕【一六四】／源氏物語古注釈書引用和歌【四一一】【六三四】【九四六】【九六三】／歌枕名寄【二二九】	和漢朗詠集【八〇四】／撰集抄【六七】	拾遺和歌集【二四三】／和漢朗詠集【三八一】／歌枕名寄【二〇六三】	枕草子【八】／源氏物語古注釈書引用和歌【二三六八】	古今和歌集【三三七】／新撰和歌【一三八】／古今和歌六帖【七三六】／和漢朗詠集【三八三】／友則集【七】／三十六人撰【五七】／悦目抄【七】／継色紙集【九】／題林愚抄【五七二六】／定家八代抄【五六〇】

×	△	×	×	○	△	物
四	四	四	四	三	三	三
122	120	118	110	109	105	103
<p>あたらの中引歌／あたらの夜の月と花とをおなじくは心しられんにみせばや／「あたらのよ」世と夜と両通に用、世に用るかた也。本歌、夜か。</p>	<p>玉すだれとのみ引歌／玉すだれあくるもしらでねし物を夢にも見じと思ひかけきや／伊勢</p>	<p>今さらかなしうおもほし引歌／夢とのみおもひなりにしよの中を何今さらにおどろかすらん</p>	<p>誰ためぞや引歌／岩くゞる山井の水をむすびあげてたがためをしき命とかしる／「雪の山を求るとも」などおもひきりながら、さすがに生とどまりたきも、父母にさきだつゆへぞかし。さなくは、又おもひきりたる計にてもあらんをといふ心也。</p>	<p>あすしらぬ世の引歌／拾遺 つらゆき／あすしらぬ我身と思へどくれぬ間のけふは人こそかなしかりけれ／大宮故に命惜と也。</p>	<p>物ならなくにと引歌／貫之／いよによるものならなくにわかれ路の心ほそくもおもほゆるかな</p>	<p>いかまほしきは引歌／源氏物語 桐つば／かぎりとしてわかるゝ道のかなしきにいかまほしきは命なりけり</p>
<p>後撰和歌集【一〇三】／信明集【九九】／俊成三十六人歌合【七〇】／時代不同歌合【一八一】／三十人撰【八一】／三十六人撰【一〇〇】／古来風体抄【三〇五】／中務集【二七九】／雲玉集（馴恋）【九四】／定家八代抄【二六七】／三百六十首和歌【五五】／歌林良材【四二四】／源氏物語古注釈書引用和歌【二二五】【三〇九】【四二六】【八五七】</p>	<p>続後拾遺和歌集【一二一八】／伊勢集【五五】／秋風和歌集【九三二】／源氏物語古注釈書引用和歌【七七二】【九六九】</p>	<p>拾遺和歌集【一二〇六】／金葉和歌集三奏本【四三〇】／後葉和歌集【四二二】／時代不同歌合解題【九】／女房三十六人歌合【九三】</p>	<p>伊勢集【四二四】／源氏物語古注釈書引用和歌【三五九】</p>	<p>古今和歌集【八三八】／拾遺和歌集【二一三七】／万葉集時代難事【三】／定家八代抄【六四七】／源氏物語古注釈書引用和歌【三五八】</p>	<p>古今和歌集【四一五】／拾遺和歌集【三三〇】／古今和歌六帖【二三五〇】／貫之集【七六四】／源氏物語古注釈書引用和歌【三三五】</p>	<p>物語二百番歌合【八七】／風葉和歌集【六五二】／源氏物語【一】</p>

×	×	物	×	物	×	物	物	×
四	四	四	四	四	四	四	四	四
148	139	138	136	130	128	125	125	123
友にわかるゝ引歌／れるよりもひとりはなれてとぶ雁は友にわかるゝ我みかなしも／「我身かなしも」の心かなひたり	空をのみ引歌／大空は恋しき人のかたみかは物おもふごとくに詠られけり	是なくはとも引歌／伊勢物語／かたみこそ今はあだなれこれなくは忘るゝひまもあらましもを	松もはづかしう引歌／いかにしてありとしられじ高砂の松のおもわんこともはづかし	あらかかげふせぎし引歌／源氏 桐壺巻 作者桐つぼの更衣母／あらかき風ふせぎし陰のあれしより小萩がうへぞしづ心なき	取かへす引歌／取かへすものにもがなやいにしゑをありしながらのわが身と思はん	又、源氏 引歌／たまのありか 桐つぼ／たづね行まぼろしもがなつてにだに玉のありかをそこしるべく	玉のありか引歌／源氏 幻／おふ空をかよふまぼろし夢にても見えこぬ玉の行えたづねよ	うつせみのと引歌／うつせみはからを見つゝもなぐさめつ深草山の煙だにたて
好忠集【四三二】／源氏物語古注釈書引用和歌【二四五七】	古今和歌集【七四三】／古今和歌六帖【二五五】	古今和歌集【七四六】／小町集【二一四】／太平記【五五】／伊勢物語【二〇二】／定家八代抄【二四一七】	源氏物語古注釈書引用和歌【四】	物語二百番歌合【二二七】／源氏物語【五】	源氏物語古注釈書引用和歌【二六八】（三句いにしへを）【二六】【三五三】【三七三】【五六三】【八七八】【九四一】【一七九七】【一九三三】（以上三句よのなかを）	物語二百番歌合【二三二】／源氏物語【六】／無名草子【六】／源氏物語歌合【三】	物語二百番歌合【二二九】／源氏物語【五八三】	古今和歌集【八三一】／新撰和歌【一六六】／遍昭集【一三】／大鏡【一一】／今昔物語集【六〇】／宝物集【五四二】／定家八代抄【六四四】／五代集歌枕【四〇】／歌枕名寄【一〇七一】／源氏物語古注釈書引用和歌【五二七】【八二〇】【九二六】

物	物	×	×	△	○	○	×
五	五	四	四	四	四	四	四
214	206	179	172	168	166	160	155
有しに増る引歌／伊勢物語／いでゝ行ば誰かわかれのかたからんありしにまさるけふはかなしも／双紙の地よりいふこと葉なり。	吹とく声の引歌／源氏／春かぜに霞吹とくこゑはあれどへだてゝ見ゆる遠の白波／八宮	忍山とや引歌／しのぶ山しのびてかよふみちもがな人のこゝろのおくもみるべく	ちちばなのと引歌／むかしをばはなたちばなのなかりせばなにゝつけてか思ひいづべき	玉にぬかなん引歌／よりあわせてなくなる声を糸にしてわが泪をばたまにぬかなん／此歌は七条后うせ給へる時、伊勢がよめる也。今、藤つぼの女御のわかれを、これにておもひよそへて、ずんじたる者なり。	浅ちがうへの霜よりも引歌／後拾遺和歌集 齋宮女御／かればつる浅茅がうへの霜よりもけぬべきほどをいまかとぞまつ	袖につけても引歌／後撰和歌集 よみ人しらず／人しれぬわが物思ひのなみだをば袖につけてぞ見すべかりける／此歌、言葉へかけて見る也。紫紙は、はなにかよふ色なるゆへ也。	忍とはせじ引歌／おのづから忍とはせじそれをだにおもひとがむる人もこそあれ
伊勢物語【七七】／源氏物語古注釈書引用和歌【七六〇】／続後撰和歌集【八四〇】（初句いとひても）／古今和歌六帖【二三五六】（初句いとひては）／業平集I【七四】（初句いとひては）／業平集II【二二】（初句いとわひて）／源氏物語古注釈書引用和歌【六〇三】【九七九】（初句いとひては）	物語二百番歌合【二〇七】／風葉和歌集【二一】／源氏物語【六三二】	新勅撰和歌集【九四二】／古今和歌六帖【八六六】（二句しのひにこえむ）／竹園抄【四二】／伊勢物語【二三】／歌枕名寄【六九三二】	後拾遺和歌集【二二五】／大式高遠集【三四三】／難後拾遺抄【三二六】／題林愚抄【二二二二】	古今和歌六帖【二四八〇】／伊勢集【四八三】／源氏物語古注釈書引用和歌【三三四】【四九七】	後拾遺和歌集【九〇二】／齋宮女御集【二二二】／村上天皇御集【五三二】	後撰和歌集【七六二】／信明集【二三七】	題林愚抄【六二九八】（初句よしやたた）

物	○	○	物	物	×
五	五	五	五	五	五
219	218	218	217	216	215
池のたまもと引歌／右大和物語に云／わぎもこがねくたれ 髪をさるさわの池のたまもと見るぞかなしき／人丸	り。 おの共、おなじく自殺したりし事、花山院のつくらせ給 ふ大和物語にあり。されば、爰にて、女はうなひ乙女とな ぞらへて、ちぬ男とやさ、男ともいわれてうせやせんとな り。 だといひけり。二人ながら心ざしのおなじ様なりしかば、 女おもひわづらひて、生田川に身をなげしとなり。二人の いどみあらそひけり。男の名、一人は智努といひ、独はさ、 に住人有。うなひ乙女といふ女なりけり。それを二人壮士 に引歌／前に同じ／つかのうへの木の枝なびけりきくがごと ちぬおとこにしよるべかりけり／むかし、津の国芦屋の里	我こそちぬとやさ、だとや引歌／万葉集九 田辺福麿／い にしへのさ、だ男のつまどひしうなひ乙女のおきつきぞこ れ	身さへ流るゝとかや引歌／伊勢物語／浅みこそ袖はひづら めなみだ川身さへながると聞ばたのまん	咲花の下にかくるゝ引歌／伊勢物語／咲花の下にかくるゝ 人おふみありしに増る藤の陰かも	心のはんにさへ引歌／なき名ぞと人にはいひてありぬべ し心のとわぢいかゞこたゑむ
拾遺和歌集【二二八九】／拾遺抄【五五五】／人丸集【二 二二】／三十人撰【二〇】／三十六人撰【九】／綺語抄 【三三一】／和歌童蒙抄【三二三】／袋草紙【二一】／万 葉集時代難事【三四】／柿本人麻呂勸文【二四】【四七】 ／大和物語【二五二】／五代集歌枕【一四四六】／歌枕名 寄【三二六二】／歌林良材【四三四】【五七九】	袖中抄【六〇三】／歌林良材【五〇八】	新葉和歌集解題【一八〇六】／袖中抄【六〇二】／八雲御 抄【一五一】／了俊日記【二〇】／歌林良材【五〇六】 源氏物語古注釈書引用和歌【二八九七】	古今和歌集【六一八】／古今和歌六帖【二〇七九】／業平 集I【二六】／八雲御抄【三五】／悦目抄【七四】／伊勢 物語【一八四】／業平集II【四四】／定家八代抄【一一二 五】／五代集歌枕【一三一九】／源氏物語古注釈書引用和 歌【一三九五】	玉葉和歌集【一〇六五】／業平集I【三三】／伊勢物語 【二七七】／源氏物語古注釈書引用和歌【二〇七】	後撰和歌集【七二五】／俊頼髓腦【一四六】／袋草紙【一 三一】／兼載雑談【二九】／定家八代抄【一一三】／源 氏物語古注釈書引用和歌【二四〇】【二八二】／悦目抄 【九九】（三句やみなまし）

物	○	○	×	物	物	△	×
五	五	五	五	五	五	五	五
244	230	229	228	225	224	222	220
落葉なりとも引歌／源氏 柏木右衛門かみ／もろかづら落葉をなににひろひけん名はむつまじきかざしなれども／落葉にても、くるしからじとなり	久してふなる露よは引歌／同 とばりあげの女王／あくるまも久してふなる露のよはかりにもひとをしらじとぞ思ふ／一条の中將のぞんじたるなり。下の句を、いづれもかなへて用たる也。初の歌は「人の誰ぞも」の心ひとつ也。	秋風の心もしらず引歌／新勅撰集 よみ人しらず／秋風の中將吟也	いづれか秋に引歌／もえいづるもかるゝもおなじ野辺の草いづれか秋にあはではてめや／是は上の句をもちるたるなり	春なかるらし引歌／伊勢物語／いつの間につらう色につきぬらん君が里には春なかるらし／女二の宮をうらみ奉る人や有と也。	露やまがふ引歌／伊勢物語／秋や来る露やまがふとおもふまであるはなみだのふるにぞ有けり／入水せし人の事などをこゝろにふくめて、かくはふとのたまひしなり	玉の緒とのみ引歌／式子内親王／玉の緒またゑなばたへねながらへば忍ぶることのよわりもぞする	物ならなくに引歌／糸によるものならなくにわかれ路の心ぼそくもおもほゆるかな／「もう香の糸など、みづからしたまへる」と有ゆへに、「物ならなくに」と出たるなり。
物語二百番歌合【二八五】／源氏物語【四九三】	新勅撰和歌集【七二五】／一条撰政御集(伊尹)【七〇】	新勅撰和歌集【二〇七〇】／実方集【二七】	平家物語(覚一本)【四】／平家物語(延慶本)【七】／源平盛衰記【九八】	伊勢物語【三五】	新古今和歌集【二四九八】／伊勢物語【二七】	新古今和歌集【二〇三四】／式子内親王集【三一九】／百人秀歌【九二】／百人一首【八九】／定家十体【八六】／自讃歌【一八】／新三十六人撰【正元二年】【七五】／定家八代抄【九七七】／歌林良材【三九八】	古今和歌集【四一五】／拾遺和歌集【三三〇】／古今和歌六帖【二三五〇】／貫之集【七六四】／源氏物語古注釈書引用和歌【三三五】

○	○	物	○	×	×	×	○	×	×
五	五	五	五	五	五	五	五	五	五
292	290	289	288	287	286	281	279	275	251
見れば心に引歌／千五百番／なつかしき色のゆかりと思ふにも見ればこゝろにかゝる藤波／丹後	かげだにとまる物ならばかゞみを見てまなくさめてまし 影だにとまる物ならばかゞみを見てまなくさめてまし	さらぬかゞみの引歌／源氏 須磨の巻／身はかくてさすらへぬともきみがあたりさらぬかゞみの影ははなれじ／光君	袖かと思ゆる引歌／古今和歌集／秋の野は草のたもとかはなすゝきはほに出ゝまねく袖とみゆらん／有原宗やな	くらべぐるしきぞや引歌／世の中はくらべぐるしくなりにけりながくみじかくおもふすじなき	命あらばとのみ引歌／えぞしらず今こゝろ見よ命あらば我やわするゝ人やとわぬと	心ともせぬ引歌／いなせともいひはなたれずうきものは身を心ともせぬよなりけり	立名とならば引歌／夕煙さしもくるしき下もゑのたつ名とならばなをやこがれん／新後拾遺 深守法親王	きえせぬほど引歌／うきながらきえせぬものは身なりけりうらやましきは水のあわかな	ともすれば打詠がちにて引歌／大空は恋しき人のたぐひかわものおもふことにながめられけり
千五百番歌合【五四九】／題林愚抄【一四五九】	風葉和歌集【五二八】／源氏物語【二七三】／無名草子【一一一】	物語二百番歌合【三七二】／風葉和歌集【五二七】／源氏物語【一七二】／無名草子【一一一】	古今和歌集【二四三】／新撰万葉集【一〇三】／古今和歌六帖【三七〇一】／寛平御時后宮歌合【八六】／新時代不同歌合【五〇】／和歌一字抄【一一七二】／後六々撰【一三四】／和歌初学抄【八九】／定家八代抄【三四五】	古今和歌集【三七七】／古今和歌六帖【二二九九】／定家八代抄【七三九】／源氏物語古注釈書引用和歌【二二七】	後撰和歌集【九三七】／伊勢集I【一七】／奥儀抄【三一五】／和歌色葉【三三三】／色葉和難集【四三】／歌林良材【三八七】／源氏物語古注釈書引用和歌【三三九】【九三八】【九九六】【一七三三】	新後拾遺和歌集【九六三】／題林愚抄【七五七二】	拾遺和歌集【一三三三】／拾遺抄【三七四】／時代不同歌合【一七九】／麗花集【二一八】／中務集II【二九三】／源氏物語古注釈書引用和歌【三八三】【二六六九】	古今和歌集【七四三】／古今和歌六帖【二五五】	



○	○	○	物	○	物	物	×	×
六	六	六	六	六	五	五	五	五
313	312	311	310	309	307	301	294	293
つらき御心にも引歌／千載和歌集／恋しなば我ゆへとだにおもひ出よさこそはつらき心なりとも／権大納言実国	人のうきせに引歌／新勅撰集／なみだ川みなはにそでをせきかねて人のうきせにくちやはてなん／前関白	逢より外の葉／拾遺 引歌／我こそは見ぬ人こふるやまひする逢より外のやむ葉なし	玉しるのうき身すてて、まよひ出なば、むすび留給へ引歌／思ひあまり出し玉の有ならん夜ふかく見え玉むすびせよ／伊勢物語／玉しるをむすび留と云事、歌をよみて三年長生の事あり	情計にもやと引歌／玉葉和歌集／ことの葉は只情にも契べし見えぬころのおくぞゆかしき／九条左大臣女	世語に引歌／源氏 若紫卷／世がたりに人やつたゑむたぐひなきうき身をさめぬゆめになしても／藤つぼ	みたらし川のかひもなく引歌／伊勢物語 業平／恋せじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな／御さん、のび給ふべき御いのりしたまへども、そのかひもなく、りん月御誕生有しとなり	藤の裏葉と引歌／春日さす藤のうら葉のうらとけて君しおもはゞ我もたのまん	何にかゝれる引歌／松かぜの音せざりせば藤波のなにゝかゝれるはなとしらまし
千載和歌集【七七四】／実国集【四〇】／宝物集【二八八】	新勅撰和歌集【八九六】／道家百首【八三】／歌枕名寄【四八八一】	拾遺和歌集【六六五】（四句あふひならては）／源氏物語古注 釈書引用和歌【二六七】（三句くせつけれ）	伊勢物語【一八九】／源氏物語古注 釈書引用和歌【六二一】	玉葉和歌集【二三八八】／題林愚抄【六五六四】	物語二百番歌合【二四三三】／風葉和歌集【八七二】／正徹物語【一一〇】／源氏物語【六一】	古今和歌集【五〇一】／新撰和歌【三五六】／金玉和歌集【四一】／新撰髓脳【三】／俊頼髓脳【一〇一】／奥儀抄【八六】／袖中抄【五五二】／六百番陳状【二二七】／古来風体抄【二七三】／和歌色葉【六二】／近代秀歌【九四】／井蛙抄【七】／伊勢物語【一九】／定家八代抄【二四二】／五代集歌枕【一一六四】／歌枕名寄【二二九】／源氏物語古注 釈書引用和歌【四一一】【六三四】【九四六】【九六三】	後撰和歌集【二〇〇】／六百番陳状【二七】／色葉和難集【五五二】／源氏物語古注 釈書引用和歌【三三四】	金葉和歌集二度本【八四】／金葉和歌集三奏本【八七】／和歌一字抄【三七五】／愚問賢注【二三】／金葉和歌集初度本【一二五】／題林愚抄【二四八七】

物	物	物	×	×	○	○	物	○
六	六	六	六	六	六	六	六	六
325	324	323	322	321	319	318	317	315
袖の色にまがふうす雲引歌／薄雲女院死後、光源氏／入日 さすみねになたびくうすぐもは物思ふ袖の色にまがへて	玉はぬくとや引歌／小野御休所／此春は柳の目にもたまは ぬく咲ちる花のゆくゑしらねば、源氏、柏木うせ給ひぬる 春、夕霧、一条の宮をとぶらひ奉り給ひし時、かくよみ給 ひしなり。「咲ちるはなの行ゑしらねば」と有を用てきこゆ。	春のかきね引歌／光君 源氏 紫の上死去の後歌／今ほと てあらしやはてんなき人の心とゞめし春のかきねを／「何 となき曙、霞くる、夕部迄の、ゑんなることの葉をつくし」 と云たる首尾也。	おくるゝほどの引歌／誰とてもとまるべきにはあらねども おくるゝほどの猶ぞかなしき	つるにはとまる道かは引歌／かなしさもかつはおもひてな ぐさめよ誰もつるにはとまる道かわ	かくてのみ引歌／玉葉和歌集 祐子内親王家紀伊／逢事の かくてたへなはあわれわが世ゝのほだしと成ぬべきかな	はかなきすすさみ引歌／玉葉集 従三位為子／物おもへばは かなき筆のすすさみにも心になたる事ぞかるゝ	うらめしくも春よりさきにちり給ひけん引歌／源氏 柏木 の巻／うらめしやかすみの衣誰きよと春よりさきに花のち りけん／柏木の右ゑ門うせ給ひし時の歌なり。「はなをもま たで」といひたる首尾などにかよひてきこゆべし。	いとかく物を引歌／新勅撰和歌集／たとふれば露も久しき 世の中にいとかく物をおもわずもがな／謙徳公
源氏物語【三〇五】	源氏物語【五〇六】	物語二百番歌合【二二五】／風葉和歌集【六一四】／源氏 物語【五六八】／無名草子【二二五】	千載和歌集【五五九】	千載和歌集【五五八】／栄花物語【二八五】	玉葉和歌集【一五三七】／祐子内親王家紀伊集【一〇】	玉葉和歌集【一五三五】／六華和歌集【一四七四】	風葉和歌集【六一六】／源氏物語【五〇九】／源氏物語歌 合【九二】	新勅撰和歌集【七一四】／一条撰政御集（伊尹）【六九】

○	○	○	○	○	○	○	○	○
六	六	六	六	六	六	六	六	六
337	336	335	334	333	330	328	329	327
<p>此国人にならんものとは引歌／後拾遺和歌集／おもひきやふるき都を立はなれ此国人にならんものとは／僧都懐寄</p>	<p>しらでぞ山の引歌／続千載集／いとわじなうき身にそふるうき身ともしらでぞ山のおくはもとめし／公雄</p>	<p>こなたかなた引歌／新古今和歌集／あしひきのこなたかなたに道はあれど都へいざといふ人ぞなき／二条院讃岐</p>	<p>夕日さす引歌／嘉元御百首／夕日さす山の端みればたへぐに空行雲の陰ぞかゝれる／為世</p>	<p>橋姫の身をうぢ川に引歌／伏見殿千首／橋姫の身を宇治川にとぶほたるきへぬおもひや今もゆらん／親長</p>	<p>又あわれに琴を引歌／古今和歌集／わび人の住べきやどゝ見るなべになげきくわゝる琴の音ぞする／宗貞／琴といふ事、びわをもことゝいへり。王照君馬のうへにて挽琴などゝいゝふれたり。爰にては、そうの琴か、又は、びわなるべし。</p>	<p>枕ばかりにも引歌／千載集／哀とも枕ばかりや思ふらんなみだたへせぬ袖のけしきを／朝恵法師</p>	<p>神のいがきもこゑぬべく引歌／前同 人丸／千早振神のいがきもこゑぬべし今は我身のをしげくもなし</p>	<p>すてはてんとおぼす命引歌／拾遺和歌集／すてはてん命を今はたのまれず逢べき事の此世ならねば／よみ人しらず</p>
<p>後拾遺和歌集【一〇一七】／難後拾遺抄【八八】／宝物集【二七八】／題林愚抄【九九八八】</p>	<p>嘉元百首【一五八九】／題林愚抄【九四八八】／続千載和歌集【二〇〇〇】（初句なげかじよ）</p>	<p>新古今和歌集【一六九〇】／和歌一字抄【一一六七】／定家十体【二七〇】／題林愚抄【八五六八】／定家八代抄【七八四】／古今和歌集古注釈書引用和歌【五〇〇】</p>	<p>嘉元百首【九八一】／題林愚抄【八五九〇】／為世集【二九】</p>	<p>題林愚抄【二四七四】</p>	<p>古今和歌集【九八五】／遍昭集【二七】／定家八代抄【一六九八】</p>	<p>千載和歌集【七三九】</p>	<p>拾遺和歌集【九二四】／拾遺抄【二四六】／新葉和歌集解題【二六七二】／古今和歌六帖【一〇六五】／人丸集【一九五】／古来風体抄【一三三】／定家八代抄【一二四三】／源氏物語古注釈書引用和歌【四六三】</p>	<p>拾遺和歌集【九二七】／拾遺抄【三六九】</p>

○	
六	
338	
唐衣うらめしかりしとかや引歌／同集 忠成／から衣うらめしかりし都のみ来てはかなしきこの里ぞうき／此歌も前のうたも王昭君をよみたる歌なれば、姫君の御ためにはゆしきとなり。	為忠家初度百首【七二五】／題林愚抄【九九九一】

(注記)

\*1 表の一番上の出典注記に関する記号は頭注本文内における出典注記の状況を示したものである。「○」出典注記あり、「×」出典注記なし、「△」作者名のみ注記あり、「物」出典注記に物語を記している、をそれぞれ意味する。

\*2 頭注番号は『鎌倉時代物語集成』と同一番号とする。

\*3 他書所伝の歌集名・歌番号は『新編国歌大観』所収のものとする。また掲出順も同書の収載順に従う。底本の違いによる私家集の別は『私家集大成』に準じⅠ・Ⅱを付して区別した。原則として一句以上異なる和歌は掲げない。